

# 大 学 図 書 館 問 題 研 究 会 京 都

〒607-8175 京都市山科区大宅山田町 34

京都橋女子大学図書館 田北十生気付

(Tel) 075-574-4118

(Fax) 075-574-4124

新年おめでとうございます！



## 大学図書館問題研究会近畿4支部新春合同例会 40人の参加で盛り上がる！

今年は京都支部の担当で1月22日に京都私学会館で行われましたが、当初参加申込が少なくて、心配されていましたが、当日40人の参加で会場は一杯になり、活発な意見も出て時間が足りない状況でした。

今回参加者の特徴は、会員以外の参加者が9名もいたことです。その中には京都府立図書館の方もいました。また、奈良、大阪、兵庫以外からは愛知県からの参加者もありました。

もう一つ今回の特徴(?)は、講師の南浦氏が入会されたことです。(2年分の会費も頂いたそうです)

例会後の懇親会のも22名の参加があり、こちらも大いに盛り上がりました。

\*後日の話：編集子の方に紀伊国屋京都営業所長さんが来て、南浦さんに聞いたんだけど、私も大図研の会員にしてもらえないだろうかと云ってました。

## 第2回例会予告

テーマ：大学図書館ホームページを考える

と き：3月11日(土) 14:00~17:00

と ころ：未定(2月号でお知らせします)

講 師：井上雅人(立命館大学図書館)

### 新会員紹介

南浦 邦仁 (ミナミラ・ケニト) さん

所属：ジュンク堂書店京都店

荒木 千夏絵 (アラキ・チカエ) さん

所属：立命館アジア太平洋大学

お二人に歓迎の拍手を送ります。

目次	例会報告、第2回例会予告……………1頁
	新会員紹介……………1頁
	京都大学附属図書館創立百周年記念公開展示会…2頁
	百年前の読書と20世紀の末の読書……………4頁
	会費納入のお願い……………5頁
	研究例会「大学図書館と図書館の自由」で考えたこと…6頁
	第5回支部委員会報告……………7頁
	数珠つなぎ(第46回)……………8頁
ご意見・ご要望、投稿はメール、又はFAXで 編集気付(kazuodesu@ma2.justnet.ne.jp) 田北まで	

## 京都大学附属図書館創立百周年記念公開展示会 お伽草子—物語の玉手箱—

澤 居 紀 充

### はじめに

京都大学附属図書館では、創立百周年を迎えた昨年（1999年）、記念事業の一つとして公開展示会「お伽草子 □ 物語の玉手箱 □」を開催した。会場の図書館3階の展示ホールには、11月24日から12月7日まで14日間の会期中に、教職員・学生、一般市民、専門家、出版・書店関係者、さらに小中学生など約2,000名が訪れました。

約1,000名から寄せられたアンケートでは、「これほど多くのお伽草子の諸本が一堂に集められて展示されるのは珍しいこと。非常にありがたかった」「色彩の美しさに目をうばわれました」「ストーリーがわかるようになっていたので、楽しかった」「とても楽しく、現代文の絵本があれば見てみたい」など大好評でした。

また、専門家からも「京大の目録は書誌の点でも充実して、資料的価値がある」との批評をいただいています（徳田和夫「学界展望 □ 中世」『国文学解釈と教材の研究』平成12年2月号）。

### なぜ「お伽草子」か

今回の展示会では、京都大学所蔵のお伽草子96種、144点の中から、美しい奈良絵本を中心に88点を一挙公開しました。そこで、なぜ「お伽草子」か、ですが、一つは、図書館の百周年記念行事にふさわしい企画として、日本人共通の物語の記憶を形作っているお伽草子を取り上げ、日本人の読書生活を考えるよすがともなれば、ということです。

もう一つは、専門家だけでなく、広く市民にとっても親しめるものとして、奈良絵本を中心に据えました。その鮮やかな色彩には、見る人すべてが驚嘆されています。

### お伽草子とは

誰でも知っている日本の物語、たとえば浦島太郎、一寸法師、鉢かずき、酒呑童子、ものぐさ太郎などは、みんなお伽草子にあります。これらは江戸時代の中頃に、大坂の書肆渋川清右衛門が「御伽文庫」と名づけて出版したものに含まれ、ここからお伽草子の名が広がりました。

今お伽草子といわれるものは、狭い意味では、この渋川版をさし、広くは室町時代から江戸時代初期にかけてつくられた物語草子類の総称としても使われます。研究者の間では、室町時代物語、あるいは中世小説とも呼ばれています。

### 400編モ

これらの物語は、400編（人によっては500編）が伝えられており、公家、僧侶や神仏、武家、庶民、異国、異類など主人公によって分類されるのが普通ですが、この展示会の記念講演をされた池田敬子教授（京都府立大学）は、その講演の中で、作品の扱う素材と手

法の組み合わせに注目した分類を提唱されました。

## みどころいっぱい

このようなお伽草子を展示会としてどのように料理するか、実行委員会として次のような見どころを仕上げました。

### <所蔵目録の作成>

- ① 京都大学所蔵のお伽草子を調査し、目録を作成。96種144点を確認し、それぞれに詳細な書誌的記述と解題をつけました。これは今後のお伽草子研究に大いに役立つと思います。この目録にカラーの口絵をつけた展示図録を2,000部発行しました。これは今後京大電子図書館に収録する予定です。

### <彩色の美>

- ② 目の覚めるような美しい奈良絵本を中心に88点を展示。このほか幸若舞曲の特別展示2点、弁慶関連の平家物語や吾妻鏡などの参考展示5点があります。この彩色の美を生かすために、とくに9点を選んで、その全挿画をカラー写真パネルにし、キャプションで物語の展開が分かるようにしたことは好評でした。

### <絵巻を電子図書館で>

- ③ 電子展示(京大電子図書館)。巻物を広げる動作そのままにパソコン画面で、絵巻き物を見ることができるようになりました。

### <描画に着色>

- ④ お伽草子の挿絵に現代感覚で着色(パソコン、クレヨン、水彩)。現代のお伽草子絵をつくる試みであると同時に、昔の描画に色をつける作業を通じて、お伽草子が身近なものとなります。学生、大学院生、図書館職員の作品60点を展示しました。

### <子どもも参加>

- ⑤ 子ども読書運動を進めている京都の地域文庫、子ども文庫によびかけ、大きな協力を得ました。浦島太郎のぬりえが13文庫151名から250枚よせられました。お伽草子は「絵解き」といって、いわば子ども文庫でいう「読み聞かせ」ともなっていたといわれていますから、共通性があります。小中学生の参加は約100名でした。子どもの来館者や浦島太郎のぬりえ参加者に、『おとぎぞうしぬりえ集』を配布したところ、大人からの要望も強く、発行部数は500部に達しました。中学校の先生が、教材用に持ち帰られたこともありました。

### <弁慶についての講演>

- ⑥ 最後に、池田敬子先生(京都府立大学)の講演「弁慶像の展開—平家物語から室町物語まで—」です。29日(月)午後1時30分から、AVホールで開催し、大会議室にも大画面のモニターを設置。約200名の出席でした。

## おわりに

展示会は京大附属図書館の各課から実行委員を出し、文学部図書室、同美学研究室、総合人間学部図書室の協力を得ました。また専門的見地から、大学院文学研究科の大学院生4名の全面的協力を得ました。

マスコミの報道では、読売、デイリーヨミウリ、朝日、京都、リビング京都、FM東京(全国ネット)、KBS京都各社の取材がありました。ポスターの郵送範囲を従来の大学・公共図書館から、中高校、京都市内の全博物館・美術館に拡大したことも宣伝面での特徴です。

(さわい としみつ・京都大学附属図書館情報サービス課)

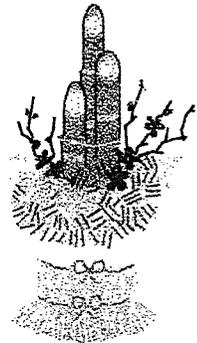
## 百年前の読書と20世紀の末の読書

篠原俊夫

丸善発行の學燈の最新号(注1)に鹿島茂の「魯庵アンケートの卓見」と題するエッセイが掲載されている。今から百年前、丸善の洋書選定係で同時に初代の學燈の編集長であった魯庵の行った読書に関するアンケートについて詳しく紹介している。アンケートに応じたのは上田敏、内村鑑三、井上通泰等、明治後半期の碩学や名士79名である。

『十九世紀に於ける欧米の大著述に就ての諸家の答案』と題してアンケートの集計結果は公表された。アンケートの対象となった分野は自然科学、人文・社会科学、哲学・宗教、文学・芸術の諸分野にわたり、それぞれの専門家に世紀を代表する著作を推薦するよう依頼した。回答を寄せた人たちは言うまでもなく当時の日本を代表する知識人である。したがって、回答の水準は百年前の日本の知識人がどれだけ西欧の文化を咀嚼、吸収し得ていたかを計る目安となる。回答結果は以下のようなものであったらしい。

①ダーウィン『種の起源』	32票
②ゲーテ『ファウスト』	16票
③スペンサー『総合哲学大系』	15票
④ショーペンハウエル『意志及び表象としての世界』	14票
⑤コント『実証哲学講義』	13票
⑥『エンサイクロペディア・ブリタニカ』	11票
⑦セニョボス『現代欧州史』	11票
⑧マルクス『資本論』	8票
⑨ユゴー『レ・ミゼラブル』	7票
⑩ダーウィン『人類の進化』	7票
⑪ハルトマン『無意識哲学』	6票
⑫ヴント『生理的心理学』	6票
⑬ブール『近代史』	6票
⑭オンケン『一般史』	6票
⑮ラスキン『近代絵画論』	5票
⑯トルストイ『アンナ・カレニナ』	5票
⑰マイヤー『大百科全書』	5票



大部分の著作は今でも入手可能であるし、ある程度読まれてもいるはずである。ダーウィン、ゲーテ、マルクス、ユゴー、トルストイの著作については、40年遡る私の学生時代にも必読書とされていた。今の学生に必読書という概念は無いかも知れないが、学生時代に読むべき重要な古典としての評価は変わりはないだろう。そうして見ると百年前の知識人の書物に関する情報は該博で、評価の物差しも正確であったと言える。

彼等が読書の対象としたのは、大部分は英語で書かれた書物であり、フランス人の著作も英訳によって読まれたらしいが、それにしても翻訳書がほとんど無い当時であって原著にあたりながら、相当広範囲な読書をこなしていた当時の知識人の力量に驚かされる。

高等教育が普及する以前の日本では、読者層はごく限られたものであったが、その一握りの知識階級は欧米の著作を独力で読むことで知識を輸入するしか方法が無かった。そのせっぱ詰まった状況が嫌が応でも彼等の外国語の読解力を高めたといつて間違いないと思う。

あまり信じられないけれど芥川龍之介が来客と話しながら英語の本をひょいひょいと頁をめくりながら読んでいたという伝説がある。芥川は1日に何頁くらい原書が読めるかと尋ねられて、百の単位ではなく千の単位で答えていたと記憶している。

夏目漱石にしても芥川にしても英文学は専門であるから読めて当然かも知れないが、現代人から見て異常に高い語学力と集中力を持って原書を読んでいたと推測できる。

これもどこかで書いたかも知れないが、娘の森茉莉によれば森鷗外のドイツ語も日本人離れしたものであったらしい。知識人たらんとすれば語学力が前提とされる当時の状況が語学の達人を生んだということを翻訳書が反乱する現代の状況下で理解するのは難しい事かも知れない。

魯庵の行ったアンケートのその後の話題であるが、ダーウィンの『種の起源』がアンケートの一位を占めたことで丸善にはそれを読みたいという人々の注文が殺到したらしい。

注文を裁くために丸善はわざわざ版元に交渉して廉価版を造らせて、それを販売したというのだから殺到という表現は嘘ではない。その廉価版の『種の起源』は丸善の天井につかえるほど積み上げられていたが、それをたった二、三ヶ月ですべて売り切ったというのである。本を購入した人が原書のダーウィンをすべて読んだとは考えられないが、それだけ多くの人を読もうとした意欲だけでも私の想像の埒外である。

百年という時間が経過して現在の読書はどういう状況下にあるだろうか。国内の出版は本質的な意味では危機的状況下にあるが、出版点数をみる限り繁栄している。外国の出版物を入手することは手段としても格段に容易で迅速になった。大学図書館の資料購入費は先細り傾向であるが、平成不況下にあっても日本の経済力は世界的視野のなかではまだ優位な位置にある。一方でインターネットによる情報入手は情報の陳腐化を加速度的に速めている。

それは長いスパンで考えれば、印刷媒体としての書物の影響力を低下させる方向に働くだろう。このような状況下で、百年前と同じ趣旨のアンケートを実施したとして、意味ある回答が寄せられるだろうか。

もはや読むべき世界的思想や文学という発想は不可能な状況だと誰もが考えているというのが正解なら、魯庵をまねて20世紀を締めくくるアンケートを行うことは不可能というほかないのだが、せめて大図研の会員諸氏の意向は何って見たいと思う。ジャンルを越えて、「世界の書物 - 私のベスト10」と題するアンケートを実施してみたらどうだろう。

もしこの一年の間に私宛に回答をよせてくだされば、魯庵にはおよぶべくもないが、私がそれを集計し、分析してみたいと思っている。「世界の書物 - 私のベスト10」には日本の書物を含めて考えてもらっていいし、できれば選んだ理由を添えていただきたい。

アンケートに全く回答がよせられなかったらどうでしょうか。その時は身近な会員諸氏に強引に回答を求めるか、それとも何とか例会のテーマにしてみたらどうだろうと考えたりもしている。

(しのはら としお 京都大学総合人間学部図書館)

注1 學燈 v.97, no.1 (平成12年1月5日発行)

### 会員納入のお願い

1999年度会費未納の会員さんは、至急会費の納入をお願いします。  
会費についての問い合わせは財政担当支部委員の中嶋スエ子さん、又は最寄りの支部委員又は、編集子までお願いします。

## 研究例会「大学図書館と図書館の自由」で考えたこと

篠原俊夫

図書館の資料提供の自由に関して、私には忘れがたい思い出がある。大学図書館で働き始めた頃、すでに図書館が寄贈図書として取得している図書を寄贈者が回収したいので返却して欲しいという申し入れをしてきたことがあった。多分、地方自治体が発行していた市史の類だったと記憶しているが、その中に部落問題に関して不適切な記述があり、回収したいというのが申し入れの主旨であった。

新米図書館員の私には、不適切な記述があるのだから、送り返せばいいのだろうとくらいに軽く考え、当時の事務部長に手紙を見せて、回収に応じますがそれでいいですねと確認した。返事は意外にも、ちょっと待て、図書館における読書の自由を守るという観点から、回収に応ずべきでない、私が直接手紙を書いておくから、返却する必要はないというものであった。

いくら新米図書館員とは言え、回収に応じることの可否を深く考えられなかったことは、図書館員として不明という他なく、それを期に図書館の知的自由の問題を考え始めたと思う。少なくとも、その後の十数年間、私にとって主要な課題として考え続けていたという記憶がある。

最近では、改めて図書館の知的自由について考える機会も少なくなっていたので、久しぶりに支部の例会で若井さんの報告を聴きながら、もう一度原点に戻って考えなおして見る必要を感じた。

個人の人権を守ることと読書の自由を保障することのせめぎ合いは、今後ともなくなることはない現象であろうし、個々のケースについて図書館員が適切な対応を求められる場面は変わらないだろう。少なくともマニュアルに当てはめれば、考えるまでもなく回答が与えられるような問題ではない。

最近では、専門的知識がなくとも、患者の症状をデータとして入力すれば、病名と治療法を指示してくれる医者いらずのシステムまでつくられているように聞いているが真偽のほどは知らない。しかし、そのシステムが仮に優秀なできであっても最後の判断は人間が自分の責任において下すしかない。

実際に図書館で発生したいくつかの事例に基づいて討論する今回の試みは、私には興味深いものであったし、自然に議論ができるという意味でもよかったと思う。議論が伯仲すると時間の経つのが速く、今回も少し時間がたりないという感じを参加者に与えた。

21世紀の図書館を考えるとついで電子手図書館をはじめとするテクノロジーの方向に行きがちになるが、図書館のあり方を原理的に考えるという態度を失ってはならないと思う。新しい技術とそれを支える思想や原理を一体化して捕らえることがなければ、図書館のあるべき未来像は描けない。その可能性を追求するのが大図研の進む方向だということは今更と言われるかも知れないがもう一度確認しておきたいと思う。

(しのはら としお 京都大学総合人間学部図書館)

## 第5回京都支部委員会報告

2000年1月11日(火)同志社大学クローバーハウス(午後7時～9時)  
出席:篠原、呑海、井上、大館、大綱(オブザーバー)

## 【報告事項】

1. 第8回京都図書館大会 1999.12.9
2. 立命館大学で宴会 1999.12.17  
参加者5名 テーマ「図書館と自由」
3. 会員情報
  - ・入会希望者1名
  - ・他支部在籍のまま京都支部会員希望者1名あり。対応を組織担当と協議する。
3. 財政情報 ・前回から変動なし。

## 【審議事項】

## 1. 今年度の活動について

## 1) 近畿4支部合同例会

- 1) 参加申込者数が悪いので支部委員が手分けして参加者数を増やすように努力する。
- 2) 役割分担
 

・開会挨拶	: 篠原	・司会	: 大館
・会計・受付	: 呑海、大綱	・録音	: 井上
・写真	: 井上	・看板	: 田北
・原稿依頼	: 田北	・懇親会幹事	: 大館

## 2) 第2回例会

- ・テーマ: 大学図書館ホームページを考える
- ・日時: 3月11日(土) 14:00～17:00
- ・会場候補: ウィングス京都、京大会館、京都テルサ
- ・参加者数見積もり: 30名まで
- ・講師: 井上雅人氏(立命館大学)

## 3) 第3回例会

- ・テーマ: ネットワーク管理
- ・講師: 交渉中

## 2. 支部報について

## 1) 1月号について

京大公開展示会記事(京大 澤居さん) / 数珠つなぎ(京大 吉井さん)  
/ 支部例会感想(篠原さん ほか) / その他(篠原さん、井上さん)

## 2) 2月号について

数珠つなぎ(ナウカ書店 高見さん)

## 3) 3月号について

数珠つなぎ(京都学園大 高橋さん)

## 3. 京都支部ホームページについて

- ・アドレスはまだ公開しない。
- ・トップページ見出しとして What's new!、支部紹介、入会案内、メーリングリストゆりかもめ、行事紹介、支部委員会報告、組織、リンク集
- ・支部報は全文を載せず、目次のみにとどめる。

## 4. 次回支部委員会予定

2月8日(火)

## 次回大会実行委員会

1月22日(土)

12:00～13:30(京都私学会館)

